

氏 名 川畑 康成
学位の種類 博士（医学）
学位記番号 乙第281号
学位授与年月日 平成23年3月18日
審査委員 主査 教授 木下 芳一
副査 教授 藤田 委由
副査 教授 森田 栄伸

論文審査の結果の要旨

乳頭部癌は十二指腸粘膜、胆管、膵管、およびその共通管が合流する解剖学的に複雑な部位に発生する。形態学的な特徴からintestinal、pancreatobiliary、unusualの3typeに分類されておりtypeによって腫瘍の増殖スピードや予後が異なることが知られている。ところが、形態にもとづく分類は手術により腫瘍を摘出した後のみ可能で、生検組織を用いて判定することが困難であるため治療計画を立案するための有用性はかぎられたものであった。申請者は腫瘍のcytokeratin 20(CK20)、apomucin(MUC)である MUC1、2、5AC、6の免疫染色をおこない、乳頭部癌を免疫組織学的に分類し治療計画に役立てることが可能であるか否かを検討していた。対象は1983年から2007年に島根大学外科学講座において手術治療を受けた乳頭部癌43例としている。まず、申請者らはintestinal typeはCK20が陽性、MUC1が陰性である可能性が高いこと、pancreatobiliary typeはCK20が陰性、MUC1が陽性である可能性が高いことを明らかとしている。これにもとづいて免疫組織学的に乳頭部癌をCK20 (+) MUC1 (-) のI-type、CK20 (-) MUC1 (+) のPB-type、その他の染色パターンを示す0-typeに分類している。I、PB、0-typeの5年生存率は55%、35%、41%、T1-stageの腫瘍は73%、20%、24%、リンパ節転移を有するものは27%、60%、53%であり、I-typeでは腫瘍の進展が軽度なものが多いことが示された。さらにMUC5ACとMUC6をともに発現している癌は0-typeに多く、MUC5ACとMUC6を発現する0-typeの癌は発現しない0-type癌より予後が良好であることが明らかとなった。これらの成績より乳頭部癌の免疫組織学的手段を用いた亜分類が臨床的に可能で治療計画を立案するために有用である可能性が示された。本研究は十分に予後が把握された多数の乳頭部癌を用いた研究で独創性が高く、臨床的に有用な情報を提供する優れた研究であると判断された。